

本研究は、自閉症スペクトラム障がい児に対する体育的要素を取り入れた遊びを基盤にしたことばの発達指導に関して、児童の成長とともに縦断的に調査・検討することを目的とした。

現在、世界や日本の発達障害等の精神疾患の診断基準の拠りどころとされているのは、アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) が改訂を重ねながら定期的に刊行している精神疾患の診断と統計マニュアル (The Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders : DSM) である。発達障害の一つとされる自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders : ASD) は、2013 年改訂刊行された DSM - 5 において、広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorder : PDD) から名称が変更された。それに伴い、DSM - IV では PDD の下位分類に含まれていた自閉症、アスペルガー症候群、小児期崩壊性障害、特定不能の広汎性発達障害の 4 項目は、状態像を区別する妥当性はないと判断され、すべて廃止された。一方、自閉的な特性をもつ子どもは、どの子も ASD の診断名がつく (宮本、2014) という大きな改訂となった。

自閉症スペクトラムの原因や治療については、これまでに様々な見解が報告されてきたが、臨床研究や科学的研究の結果、脳の機能障害が主たる原因となっていると考えられ、ある程度長い期間にわたって問題が持続する発達上の障害であることがわかってきた。従って早期発見と介入、適切な保育・教育による、問題となる症状が改善するような粘り強い支援が必要となってくる (楯、2017)。DSM - 5 による自閉症スペクトラムの基本的特徴は、持続する相互的社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害 (基準 A)、限定された反復的行動、興味または活動様式 (基準 B) とされる。基準 A や B の症状は幼児期早期から認められ、日常の活動を制限するか障害となる (基準 C と D) とされるため、知的障害との併存も考えられるといわれている。

自閉症スペクトラムに関する最近の研究報告で、本研究課題と関連しそうな取り組みに以下の 2 点がある。医薬研究では、オキシトシンを患者の鼻にスプレーすることで脳に作用、表情が豊かになり会話がかみ合う回数が増えた (山本、2018) という。そして、本研究と同じように運動に着目した、自閉症様マウスを用いた研究である。研究グループは、自発的な運動が自閉症モデルマウスにおける自閉症様行動と、脳内シナプス密度の増加を改善させることを発見した。また、運動がシナプス貪食を促進させ、シナプス密度を正常化することを検証した。自閉症の発症および治療におけるマイクログリアの重要性を明らかにした (池谷、小山、安藤ら、2018) ものである。この自発的な運動への着目に関しては、以前より幼児体育の要素を取り入れた遊びを用い、ことばの発達に遅れをもつ幼児の指導研究 (濱田、内田、上好、2018) がある。しかし、自閉症スペクトラム幼児に対することばの指導、特に表出性言語指導に視点を定めた先行研究は見当たらない。

本研究の対象である S.H 児 (男児、8 歳) は、平成 23 年 6 月に父母、兄の間に誕生。その後、妹も誕生し現在は 5 人家族である。「誕生後、顔の表情の変化はほとんどみられなかった。叫声以外の発声はなかった。はいはいはしなかった。3 歳の頃歩き始めた。テレビを観るのは好きらしく、音楽や怪獣の出てくる番組を兄と一緒に観ている。生活のけじめや良好な対人関係をなすためにも、ことばを話せるようになって欲しい」と両親が教育委員会障害幼児相談室を訪れたのは、S.H 児 4 歳、I 保育所年中組の時である。当時、既に重度自閉症スペクトラムであると医師による診断を受けていた。無表情で多動、叫声を発し、高い所へ上るのが好きだが、遊びの内容は限定されている。これが S.H 児の成育歴と当初の状態像である。なお、午前中は保育所で活動させ、午後は数種のデイサービスならびに保健センターを利用、月に一回程度専門医通院していたという。

就学前幼児の場合、障がいの有無に関係なく、まず大切にしなければならないのは幼児とのラポート構築である。心理的には受容と共感的理解であり、具体的つながりは、興味・関心のある遊びや活動である。その過程において、幼児自身が遊びや活動の環境を広げることで自発性を養うとの期待がもてる。幼児は興味や関心のある「もの」や「こと」への関わりを殊に好むが、これは自発性の一步なのである。

S.H 児の就学前の指導プログラムは、保育所との関連をもたせる意味からも、生活としての環境・健康・ことば・表現・人間関係といったいわゆる保育 5 領域と、幼児体育を基調とした粗大運動を柱に、手指操作のおもちゃや教材・教具遊びを用いた微細運動である。S.H 児は、特に粗大運動におけるトランポリンに興味をもち、自発的に取り組むようになった。そして、次第に行動にも変容が認められるようになり、無目的行動が減少し、目的的行動が多く観察されるようになった。クレーン行動をとるようになり、トランポリンがしたくになると指を差し、「これがしたい」というような意思を示すようになった。通級 6 カ月が過ぎる頃より、ことばの発達にも変容がうかがわれるようになり始める。単純な叫声から徐々に抑揚のついた音声に変化し、以後喃語のような発声となる。「○マンマー、パッパ、セーセ、○ネンド、モーイッカイ、○アブナイヨ (7 カ月以降)」(○印は録音記録ができたことば)。これらの外言は、それぞれの行動や活動の最中に、しかも状況にマッチして発せられていた。

以上のことから、S.H 児の言語能力発達の可能性に関しては、受容性言語能力や内言能力はある程度期待できると推察される。従ってこれまでの取り組みの成果から、時間は要するであろうが、環境等必要条件を整えることで表出性言語能力にも期待がもてるものと思われる。

その後の発達経過、継続研究情況および結果については、後の研究成果報告にて詳しく述べることとする。